

幼時体験 — 本当のことを教えよう

松原ときわクラブ 石川 隆俊

何事でも、自ら体験しなければ、本当のところは分らないであろう。

私にとって、幼少のころの戦争経験は、これまでの人生を過ごす上で、少なからず影響を与えているように思う。当時をご存じない方のために、この辺りでの戦争の進行状況を、私の断片的な記憶と祖父の書き残した日記の証言を頼りに少し書いてみよう。

昭和十七（一九四二）年三月五日の祖父の日記によると、朝八時初めて空襲警報のサイレン、半鐘がなり驚くとある。敵機三十機初めて南鳥島に現れ、日本軍と交戦した。その後暫く敵機はこなかったが、昭和十九年（一九四四）十一月から、ほぼ毎日のように警報が鳴り、敵機も上空に姿をみせるようになり、防空壕に避難した、しかしまだ三多摩地区には爆撃は行われなかった。昭和二十年（一九四五）二月になって、B29などの爆撃機は大編隊をなして、関東、静岡方面に侵入を始めた。また航空母艦から発進する小型の飛行機（艦載機）がパイロットの顔が見えるくらいの低空飛行し、人家や個人を標的に機銃照射し、恐怖をあおるようになった。このあたりでも何人か犠牲になった。日本は制空権を失い、敵機は高射砲の届かない超高空を飛び、迎撃する飛行機もなくなった。B29が、飛行機雲を引きながら飛んでいる小さな機影が目に見え、ラジオが「警戒（あるいは空襲）警報発令」と繰り返す放送は今でも耳に残っている。

電波妨害のために、七夕の飾りのようなアルミ箔の短冊が空から降ってきた。降伏を勧めるビラもまかれた。焼夷弾というのは、爆弾と違って、火災を起こすための武器である。誰かが拾ってきた不発弾を見たことがある。六角形の筒で、赤と青に美しく塗られていた。爆弾より、日本の木造家屋にはより効果を示した。三月十日の東京大空襲については、祖父の日記に「昨夜十二時空襲警報、午後一時、東京の火災天高く見ゆ、昨夜B29百三十機 帝都来襲、市街地を盲爆せり」とある。夜のことなどで、私には記憶はない。

暫くして、この地で空襲を経験した。終戦の四ヶ月前のことである。祖父の日記によれば、四月四日午前三時半から四時頃のことと思われる。拝島、昭和、熊川のあたりに中型爆撃から三十発くらいの爆弾が役下された。「昭島の歴史」によれば、死者二十八名とあった。私は、拝島駅前の、現在住んでいる家の北側の松ノ木の下に掘られた仮の防空壕にいた。母と子供三人は、布団をかぶって抱き合って、数発の大音響を聞いた。敵機が去って防空壕を出ると、爆風で家の雨戸が全部吹き飛んでいた。翌朝、山の車（現在の拝島第三小学校あたりの畑に大きな穴が三つほど開いているのを見に行った。日本は、それから名古屋、横浜、大阪爆撃、鹿島灘からの艦砲射撃など徹底的な攻撃を受けたのである。

八月一日夜の八王子の空襲ははっきり覚えている。拝島から、本家（多満自慢酒造）のある熊川に避難する夜道を歩きながら、焼夷弾が花火のように落下するのを見た。西の空は真赤であった。八月十五日の終戦の玉音放送は本家の広間で聞いた。この時の事は、鮮明

に記憶している。祖父も、伯父も、父母もいた。我々家族を含め、ラジオの前に正座していた。放送を聴いたあと皆泣いていた。私には、すぐ何のことか分らなかった。そのときの祖父の日記はたった三行「晴れ、昨夜十二時空襲警報、防空壕へはいる、朝十時警報遠のき、十二時ラジオにて戦争終結の大詔勅発さる。天皇陛下自ら読み上げる」。感想は述べていない。私が小学校にあがる前の年、六歳の時のことである。

本年三月十一日東日本大震災が発生した。私事にわたり恐縮であるが、現在担当している医学関係の研究支援財団が、今回の震災に伴う被災地での医療実態を明らかにする目的で、九月に現地の専門家を集めて仙台で会議を開いた。会議の後、協力してくださる病院のある石巻市と東松島市に出向いた。石巻市は人口十七万、仙台に次ぐ宮城県の大都市であるが、ここだけで、死者三千人、行方不明者三千人近くを出した。石巻駅に行った。海よりかなり高台にあるが津波は来た。駅前の商店街は、地震で壊され、半分は戸締めになっていた。海岸に出ると、見渡す限り、土台だけ残して、家は無かった。テレビでは見ていた。しかし現場を見て、初めて自然の猛威に打ちひしがれた。現場を見なければ、本当のことは分らない。テレビでも、遺体を写すことをさげ報道していた。私は恐れずありのままを伝えるのが本当は国民への務めであると思っている。

これも私事にわたるが、小学校に入るまえの孫がいる、私か戦争経験とした年令と同じである。つい最近のこと、孫の両親が出張になり、孫を三日間預かることになった。私は、急に思い立って、孫の親にも言わずに、孫を車に乗せ、東北道をひたすら北上した。仙台で、海側に入り、九月に訪れた石巻市にきた。石巻市駅に寄った。ご存知の方もおられようが、この町は、漫画家石ノ森章太郎の「仮面ライダー」や「サイボーグ」のキャラクターの町でも知られ、商店街のあちこちに、等身大の像が置かれている。孫は、はじめ、これらの像に興奮して喜んでた。それから、多くの方が避難して助かった高台の公園から、先刻視察した海の方に車を向けた。すでにあたりは薄暗くなっていた。車は、碎石を敷いた仮の道を進んだ。信号も無く、交通整理の警官が、所々にいるだけであった。時々チャイムを鳴らしながら、警察のパトロールの車が走っていた。はしゃいでいた孫は、一言もしゃべらなくなった。明かりは、自分の車のライトだけ。孫が「あっ、お墓が倒れている」といった。公園のある高台の裾のあたりにある寺の墓地の石塔は、全都なぎ倒されたままであった。本堂は柱だけ残し、中はがらんどろであった。犬を連れて一人の男が、暗闇を歩いていた。自分の家のあとでも見にきたのであろうか。

今回の訪問は、私が孫に見せておきたいという、人に話すのものはばかりの動機からであり、罪深い気持ちさえあった。帰ってから、孫は震災のことを話さない、私も聞いていない。ただ、私は、今後人間が、愚かであるがゆえに様々な人災を引き起こし、あるいは地球規模での予測できない事態がやってくるかもしれないこと、また人智では計り知れない自然現象が存在することを教えたかったのである。

私自身は、医学者であり、人間をつい生物の一つとみなしてしまう。人間が、この世に
いるのは、ほんの偶然の結果である。人間は、二百万年ほど前に、地球上に誕生して、次々
と増殖して、命を伝えている生き物の群れの一つに違いない。その群れは、魚の群れが、
時に悪い潮目に流されるように、これまで疫病や災害で何度も失われてきた。それでも、
人間全体では、遺伝子は流れている。そうでなくても、歳をとれば、病や老化、死は、だ
れにでも平等に訪れてくる。しかし、お釈迦様も言っているように、人生に限りがある
から、この世は限りなく、いとおしく、美しい。人間に生まれたことに感謝して、元気を
出して、この世を最高に楽しいものにしたいと願うのである。 (平成23年11月記)